

時事新報

第三千四百一十一號
時事新報社

東 京 明 治 七 十 年 六 月 五 日 木 曜 日 第 六 百 七 十 七 號 日 曜 日 刊 休 日 曜 日 定 價 三 錢

時事新報

男兒ノ世ニ生ル、須ク大ニ爲ス所アルベシ人生七十歳古
來稱ナル長壽ナリ大抵ハ四十五ニテ死スルヲ常トシ更
ニ又不幸短命ナルモ少ナカラズ此壽命中ヨリ幼穉童年ノ時
期ヲ引去レバ人間ノ生涯中異ニ仕事ヲ爲スベキノ日月ハ僅
カニ二三十年ヲ過クベカラズ實ニ幻ノ如キ浮世ナリト云ハ
ザルヲ得ズ苟クモ一箇ノ男兒トシテ富貴功名ニ志アリテ
ハ夜ヲ以テ日ニ繼ギ汲々事ニ從ハズンバ忽チニテ日月逝
キ悄然獨リ其孤影ヲ顧ミテ老衰落魄ノ歎ニ堪ユザルノ
悔アルベシ

昔時封建制度ヲ以テ國ヲ立ツルノ日ニ當リテハ我日本社會
ノ組織極メテ窮屈煩瑣ニテ一寸ノ自由ヲモテ許サズ農工
商各其事ヲ世襲シ格式儀例ヲ異ニシ賢才能藝ヲ以テ身ヲ
益スルニ足ラズ殊ニ全國ヲ三百侯伯ノ領地ニ分割シ三百各
獨立國ノ体裁ヲ成シ他ト相往來スルヲ要セズ冠婚葬祭吉
凶慶弔ノ及テ所ニ一藩内ニ限リ功名榮華富貴利達ノ及テ所
モ一藩内ニ限リ一藩ノ天地外ニハ總テ我身上ニ痛痒ヲ感ス
ベキ程ノ事ヲナカリシナリ人々生誕ノ地ハ即チ其生計住息
スルノ地ニシテ兼テ又死シテ其骨ヲ埋ムルノ地ナリ、關係
相離ル前後幾代姻家相嫁娶スル百年綿々、智者トナシ愚人
トナク狹キ天地ノ間ニ踞ルシテ唯先人ノ遺業ヲ失ハシメテ
是忍レテ一新事ヲ興ルニシテ遠アラズ當時ニ於テ全社會ノ
耳目ヲ變動スルノ事件ト云ハハ麥畦變シテ菜園ト成リ少女
嫁シテ母ト成リ類ノ類ニシテ他ニ又人事ノ波瀾ナシ故ニ人々
唯其墳墓ノ地ニ固着シテ他ヲ思ハズ時ニ志ヲ立テ郷國ヲ出
ル者アルモ春燕一線再ビ又其舊巢ヲ尋テ歸來スルヲ以テ
常トシ又名譽トシテ此時ニ當リテ志士アリ蓋世ノ鴻才ヲ
抱キ獨リ大ニ爲ス所アラント欲スルモ天地ノ間コレヲ施ス
ニ道ナカリシナリ

明治維新三百ノ小天地ヲ掃テ新ヲ新ク廣キ一天地ヲ作り封建
時代ノ制度式例ハ其痕跡ヲモ留ムルコトナシ社會ノ廣キ志士
ノ手足ヲ伸バヌニ足リ制度ノ自由ナル志士ノ才識ヲ施スニ
妨ヲ見ズ貴功名唯其人ノ欲スル儘ニシテ天下ノ時勢復テ
有爲ノ士ノ雄屈ヲ許サズルナリ是ニ於テ四方ノ志士賢才
負ヒ劍ニ仗リテ各地ニ輻輳シオチ開ハシ能ク競ヒ身ヲ立テ
功ヲ成スノ道ヲ求ムル者其數亦知ルベカラズ實ニ盛ニシナリ
ト云フベシ蓋シ今日ノ天地ハ昔日ニ三百倍スルモノニシテ
其廣大ナル固ヨリ論ナシ天地廣大ナレバ人事モ多シ志士ガ
身ヲ容ルルノ地位ニモ乏カラザルハ自然ノ理ナリト雖モ近
年文明進步ノ速ナナルト外部ノ刺戟ノ強キトニ因リテ限リ
アル天地ニ關リテヤ人オチ生レ會ニ都門ヲ填塞スルノミナ
ラズ餘勢所ノ地方ニ及ビ日本全國到處ニテ人材供給ノ
過多ナルニ苦マヤルハナシ實ニ異常ノ現象ナリト稱スベシ
○在テ事ニ志シ願冠ニシテ身ヲ立ツルノ計ヲ爲ス者地
方ニ在テ事ニ志シ願冠ニシテ身ヲ立ツルノ計ヲ爲ス者地

時事新報

ル者ハ格別ナレハ然ラザル者ハ巡査、書記、學校教員ノ外
ニ適當ノ地位ヲ見出スコト難シ都門ニ在テ業ヲ求メシカ官
途進路地ヲ遺テ工商兩途餘業ナシ家ニ餘財アリテ坐
食ヲ得ルノ徒ハ兎モ角モ自カラ其才藝ニ依テ立身ノ道
ヲ求メントスル者ニ至リテハ進ムベカラズ退クベカラズ
陶トシテ日ニ歳月ノ逝クヲ歎スルノ外ニ又一策ナキモノ、
如ク然リ

然レハ我輩思フニ志士ニシテ果シテ爲スベキノ才藝ヲ抱キ
屈スベカラザルノ志操ヲ具ヘ斷然志ヲ決シテ富貴功名ヲ求
ムルノ意ナランニハ未ダ必ズシモ其遺ナシト云フベカラズ
既ニ故山ノ雲ヲ踏破シテ都門ニ出テ到ル處ノ青山我骨ヲ埋
ムベシトノ決心アル以上ハ更ニ此心ヲ擴メ其眼界ヲ遠クシ
荷クモ日月ノ照ラス限リ全地球上皆我郷ナリトモモ敢テ
當初決心ノ主義ニ反スルコトナカレバ昨日一藩ノ小天地ハ
變テテ八十餘州ノ大天地ト成リ今日日本ノ小天地亦變
テテ世界万国ノ大天地ト成レモコレヲ性シムニ足ルコトナシ
東ニ米國アリ南ニ澳洲アリ天地廣瀾ニシテ人烟稀少ナリ志
士ニシテ果シテ徒然ニ堪ユザランカ何ゾ自カラ此等ノ地ニ
就テ其才藝ヲ施スノ道ヲ求メザルヤ試ニ彼ノ英獨等ノ人民
ヲ見ルベシ少壯ノ男女ニシテ自カラ奮テ外國ニ移住スル者
毎年各十方ヲ以テ數フルコトアラズヤ英獨人民ニシテ富貴ヲ
求メ得バ日本人民モ亦コレヲ能クシテ志士ニシテ果シテ富
貴ニ志アラバ米國澳洲諸國ニ往キテ願ハズシテ可ナリ我々ハ
明治ノ今日ヨリ封建ノ昔日ヲ願フ志士ガ才ヲ出シテ
伸バヌコト能ズハ一藩ノ小天地間ニ踞ルシテ死シテ亦其名ノ
聞エザルヲ哀シムナリ願フハ他日我々ノ子孫ヲシテ今日ノ
我々ヲ願フ如ク封建ノ餘習ヲ脱スルコト能ハズ大ニ天地ニ
懸ケシテ離散シテ遠ニ又老死シテ明治ノ志士モ懸レム
ベキカナト云フコト能ハザランバ我輩ノ満足コレニ過ギヤ
ルナリ

○三條太政大臣 目下京地方へ出張中ある三條太政大臣
は来る八日京都を發し陸路歸京の途に就く由其筋へ報知
ありたりと

○山縣内務卿 山縣内務卿は去月廿六日長野縣より愛知縣
に若し翌二十七日より三日間名古屋區に滞在して縣廳及物
産組、士族教育所、始審裁判所、監獄署、病院、飲水等を巡視
し同三十日該縣縣へ向け出發したりと

○西條農商務卿 同卿が大坂へ出張する由は前報に紙上に
記せしが念昨午午後一時三十分新橋驛汽車に上り横濱へ赴き
夫より三浦汽船名古屋丸に乗り大坂へ赴きたり右に付不
在中の極方準備が農商務卿を兼任する由

○佐々木工部卿 佐々木工部卿は去月二十日井縣下敷實
より岐阜に若し翌卅一日愛知縣へ向け出發せりと

○井上工部大輔 井上工部大輔は去月二十七日長野縣より
名古屋に若し翌廿八日岐阜に赴き同三十一日三重縣名へ

時事新報

向け出發したりと

○裁判所巡視 岩村司法大輔には連日同官に轉任せし以テ
一昨日始めて大審院を巡視し又昨日は午後より東京控訴院
判所を巡視し孰れも上層に於て院長、所長又は判事等と
判事務上ノ關係ヲ證同したるよし

○官廳盛衰 農商務大臣富田正名氏は一昨三日御用
付神奈川、埼玉の兩縣下へ巡視を命ぜられたり○工部少輔
長狛林之助氏は去る二日非職御付されたり○農に高知縣へ
巡視を命ぜられたる農商務少書記官福永三兵衛は一昨三
日東京を出發し、農商務取調のより千葉縣下房州白根及
川津邊へ出張し、農商務取調のより千葉縣下房州白根及
三十一日歸京し、内務省准委任御用掛寺原長輝氏は去月
付一昨三日福岡、佐賀、熊本の三縣へ出張を命ぜられ又農に
神戸大坂其他の工場及び鐵山巡視を命ぜられたる竹田工部大
學校副校長の昨日横濱の汽船に搭し出發せたり○副七等馬
場宮次郎、副八等石川芳太郎、同戶田壽之助、同吉川半平の
諸氏は孰れも此程動位を硬はれたり

○武官補任 砲兵中佐河上繁榮氏は砲兵第四聯隊長に、歩
兵少佐市川易繼氏は陸軍傳令使に、歩兵少佐小畑壽吉氏は
歩兵第六聯隊第一大隊長に、歩兵少佐赤澤昌行氏は總務局
勸業課長に、歩兵少佐長澤六郎氏は總務局勸業課長に執れ
も去る二日命ぜられたり○陸軍歩兵中尉川富太郎氏は同
大尉も異進し教導團團長を免じて廣島鎮臺附に、同中尉米
津政教氏は東京鎮臺附を免じて教導團團長に、同中尉中尉
池原源氏の同團團長を免じて東京鎮臺附に、會計二等軍吏
中村致壽氏は同團副計官を免じて大坂鎮臺附に執れも昨日
仰付られたり

○營所位置取調 今度北海道出張を命ぜられたる小澤陸軍
少輔の御用向は今度第七軍管を北海道へ置かるゝに付右營
所位置取調の爲なりと云ふ

○陸軍大學校學生卒業 陸軍大學校は其開設の日尙遠くし
て今般始めて學期末の大試験を行ひしに歩兵少尉山口圭雄
外史の六氏は各及第して進級順次の首位を授け更歩兵中
尉に任せられたり

○軍艦着揚 軍艦は去月廿日午前四時三十分三保ヶ園を
發し陸奥國ノ海、島嶼ノ海、豊州并築、長州江崎等を經て
同廿五日午前十一時三十分長州小畑灣へ投錨したり

○若瀨丸 御石船主若瀨丸は昨日午前九時半横濱須賀より横
濱港に到着したりと

○開港式 横濱開港式は兼て築造中ある大船渠の竣功せし
かば本日皇太府宮の行啓を機會として開港式を執行する由
○銃砲合計 府下人民の所有せる銃砲の數を今度取調べし
るに洋和形共合計萬五千五百八十九挺にして又同銃は置
方三千百零九挺なりと

○コンチア氏 印度駐劄英領事少尉コンチア氏之

其は兵も角も

時事新報

我國遊歴の爲め
訪ひしが本日山
野州日光山の
○砲兵工廠一覽
時より同省准
工部省大
工長ガレモロヤ
技しく未だ同
日歸國の途ニ登
○漢國皇后の葬
先月中の紙上
故皇后の葬儀
れたるが葬儀は
して葬儀を助け
見たり

○英國皇太子の
一頃中英國皇
記したるの誤な
るものにて煤裂
と對門の地位に
○愛國のフェニ
く國府中にて
傷者若干名及
の手あはれたる
察すれば昔て英
黨は所爲あるが
關にて地主兼併
し進せし爲し
さるに苦み失望
り暴力を以て英
の一部ノ米國に
國敵なる故を
に乘して其精價
ヲ奪はんとす
ヲ奪はんとす
伏せる由なるガ
よして其罪を施
文佛國と愛國と
する者一般に多
政治にして英國
休の失策と傳
するの事なき
以て佛國を以
るも足れり
府を以て其罪
其は兵も角も

其は兵も角も